

序論

■研究背景

「柱間装置」とは柱と柱の間に取り付けられる建築の部位すべてのことをさす文化財用語であり、木造軸組の基本構造ができた後の造作工事において取り付けられる要素として定義される¹。柱間装置は建物の平面計画を決める要素であり、その意匠によって空間の演出も可能である。つまり、柱間装置は木造日本建築の内部空間を特徴づける最も重要な部分であった。これら柱間装置は各時代における需要と当時の技術により発展し、その性質は現代においても引き継がれて使用されている。これまでも建具を題材とし、その発展をたどる試みがなされてきたが、あまりにも日常生活において身近なものであったためか、記録史料が多く見つかる近世頃においても詳細なものがないとされ、文化作品に残された記録などを史料としてこれまで分析が行われてきた²。時系列での大まかな展開は太田博太郎による「建具の発展」において述べられた通りであり、それ以降もその展開を下敷きにして建具の発展を述べているものが多い。

■研究目的

建具や柱間装置として分類できるものは多くあり、さらにその意匠や形式は様々に展開しているが、本研究では太田博太郎によって述べられた「建具の発展」についての流れを下敷きとする。その中で述べられる「革命」とまで称された建具の大きな変化について整理し、その背景にあるものを明らかにすることが目的である。

■研究方法

まず、太田博太郎によって述べられた「建具の発展」の詳細を整理することで、以降あつかう2段階の「革命」の前後関係を整理する(第1章)。次に各「革命」が指す事象を抽出し、これまで行われてきた分析や推察に加え、その他関連する分野の調査を行うことによって建具変遷との関係を明確にし、その「革命」背景にあったものが何であったのかを分析、考察する(第2章、第3章)。

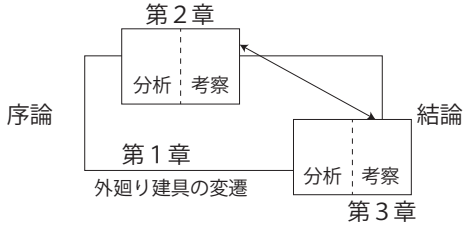


図1 本論文の構成

■既往研究

太田博太郎「書院造はどのように発展したか―建具の発展」(『書院造』, 東京大学出版会, 1966)

彼は寝殿造から書院造の住宅建築様式の中で、建具がどう変わったのかについて概要を述べている。その中で、「第二段の革命」として一本溝を通して戸袋にしまい込むことのできる「雨戸の出現」を挙げている。第一段としては蓐戸から遣戸への変化のことを挙げている。この記述によって建具の変

遷については全体像を掴むことができるが、その詳細については述べられていない。本研究においては彼の述べる変遷過程を下敷きとして、他の先行研究と整理し、今までに明らかになっている事項について整理していく。

平井聖「近代都市住宅における雨戸の変遷と近世における雨戸の発生から引通し雨戸の成立まで」(2013)

本研究は雨戸形式の変遷を形式とその設置位置に着目し、明治以降の都市住宅遺構を分析することによって、雨戸がどのような形式を基本にどのように変化したのかを明らかにしている。それを踏まえ、近世における「雨戸」と思われる柱間装置の形式の変化について、前者と同様、遺構の分析からその傾向を示し、近世後期の形式が明治以降の遺構に継承されているということを明らかにしている。彼の研究によって、1600年頃から1800年頃までの形式の推移を時系列で見ることができる。

本論

第一章 日本住宅史下における建具の変遷

本章では、先に述べた通り太田による建具の発展を下敷きに、日本住宅建築において使用されてきた建具の変遷をたどる。

- ・建具の始まりは「扉」とされており、奈良時代の住宅建築まで、柱間装置は壁か扉のみで平面が構成されていたことが、復原研究によって明らかになっている³。
- ・その後建築平面が発展し、庇の発生とともに蓐が登場するようになってくる⁴。庇の先に、押し開けられて軒から金具か何かで吊り下げられて固定されている蓐戸の姿を平安時代のものと言われる絵巻物からも見ることができる。
- ・室内を区切っていた屏風や御簾も、絵巻物に描かれているが、それとともに「障子」もそれらの場所に描かれるようになった。

仮設的な家具たちが柱間装置として建築に造り付けられるようになっている様子を伺うことができる。

- ・蓐と障子が柱間に造り付けられるのが一般化した頃に、「遣戸」と呼ばれる引違いの形式を持った柱間装置も用いられるようになり、しばらくすると蓐に代わって外廻りに用いられるようになる。1620年ごろになると蓐が住宅建築において使用されなくなる⁵。
- ・「雨戸」という表現は16世紀後半に初めて指図で使用された。文学作品では1707年の近松門左衛門『心中重井筒』とされている。慶長13(1608)年に書かれた『匠明』でも「雨戸」の記述がある。「雨戸」といってもその形式は統一されておらず、はじめのうちは落縁周りに設けられた遣戸を「雨戸」と呼んでいた。のちに多くの書院建築に用いられる引通しの雨戸が現れるのは「雨戸」の呼び方が現れてからすぐ、1608年のことである⁶。

以上の一連の流れを史料を引用しながら整理し、太田がのべる「革命」とは具体的にどの点を指しているのかを明確にした。①外廻りの建具が「蓐戸+明障子」から「遣戸+明障子」へと移行した。②雨風を防ぐ柱間装置が柱間の外に進出し、新たな空間構成を生み出した。という二段階として捉えることができる。

第二章 外廻り建具の大きな変化とその背景に関する調査①

本章では、まず一段階目の革命として外廻りの建具が「蓐戸+明障子」から「遣戸+明障子」へと移行した背景について整理する。遣戸が現れた頃に形式が移行したわけではなく、しばらくは住宅の数カ所で使用されているだけであった。

〈蓐戸が使われ続けた背景〉

これまでに行われてきた分析によると、上流貴族から好まれた格式の高さによって、さらには公的な場所としてのマナーとしてその存在に意味があったため蓐が外廻りの建具として使用され続けたのであった。完全に蓐の柱間装置が使用されなくなるのは1620年ごろまでであり、それまではやはり遣戸が普及しつつも格式を高い間の外廻りは蓐戸によって構成されている。

〈遣戸の普及は町家や民家から〉

遣戸はもう既に『類聚雑要抄』⁷の指図にも表れているように、その存在は平安時代後期から確認出来る。その使用は一部分のみであり、同時期の絵画においても上級貴族の住宅に遣戸はほとんど表れてこない。一方で、町民や僧の住宅には遣戸とみられる形式の建具が使用されているのが確認できる。

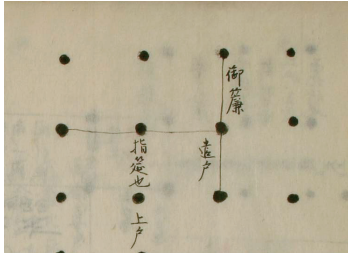


図2 遣戸の記述



図3 寝殿の図

〈分析：屋根構造形式の変化と柱間装置の関係について〉

蓐戸から遣戸への移行の理由として遣戸の利便性が上げられているが、建築構造の変化も柱間装置の展開に関係していると考えられる。中世と近世では屋根の架構に変化があり、付け加えられた庇の部分は、母屋の屋根を延長する形で屋根が形成されていたが、後になると母屋の位置は関係なく、中心から均等に屋根が形成される。そのため庇空間の成立と共に現れた蓐戸は、屋根垂木部分に付けられた金具によって支えられていたが、以上の様な屋根形式の変化によって屋根との取り扱いについてより配慮が必要になったのではないかと考えられる。実際の遺構として光浄院客殿の例をみると、蓐戸が設置される部分の軒の出がその他のものよりも1尺ほど多く取られていることが確認できる。

〈分析：中世に製作された平安時代文学作品絵画にみる建具の描画方法を通して〉

絵図にはある人物について書かれた作品や、一年に行われる行事の様子が描かれている。絵図の製作時期に関しては写本などの経緯を経ているものも多く明確ではないが、絵図をみることによって、人の動きや行事の様子とそれに対応する建具の様子を見ることができる史料として扱うことができる。これらの史料における蓐と遣戸がどのような性質を持つ建具として扱われていたのかを考察した。絵図による分析から、蓐は主な行事がある際には開け放され柱間を人が行き来できる様になっているが、半蓐が普及した頃には下半分の板を残したままであることも多く見られ、その場合は人は横の妻戸や遣戸を使用して通行していたと考えられる。特に遣戸は上流貴族住宅では絵図にはみられなかったが、少し下の階級の建

築においては蓐と遣戸が共存する姿をみることができる。正面に妻戸と蓐戸が設けられ、その室の側面に遣戸がくる例が多く見られた。つまり蓐が主流だった時、遣戸は通行口として認識されていたと考えることができる。妻戸は正面口だとすると、遣戸は裏口にあたる。

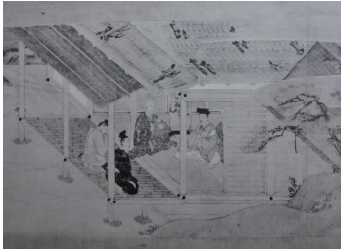


図4 念仏を行う定明の図

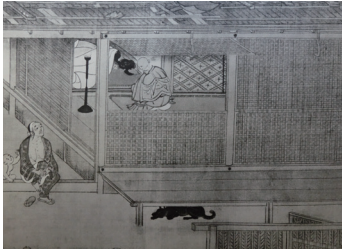


図5 母の死を悼む子の図

第三章 外廻り建具の大きな変化とその背景に関する調査②

本章では雨戸の発生のなかでも雨風を防いでいた柱間装置が柱間の外に進出し、新たな空間構成を生み出した背景を明らかにする。本来雨戸という言葉は古代から中世にかけては使用されておらず、遣戸が現代でいう雨戸の役割を果たしていた⁴。指図の中で「雨戸」という表記が出てきたとされる初めての例が、天正15(1587)年の聚楽第大広間の平面図であり、外縁に立てられた雨戸端柱の間に雨戸と書かれている。雨戸を収納する戸袋のような場所がないことから引違戸であるとされている。元和元(1615)年の名古屋城本丸広場の指図では「戸袋」の記述が見られ、引違いの雨戸から一筋の引き通し雨戸に変わっていることが確認出来る⁸。

〈分析・「雨戸」と縁の位置関係について〉

ここでは平井聖によって行われた近世における雨戸の発生から引通し戸の普及への分析を下敷きに、「雨戸」と縁の位置関係について整理した。結果、以下の傾向が明らかになった。

- ・「雨戸」発生初期は落縁の外側に設けられることが多く、引違い形式の板戸が柱間に設けられている。
- ・引通し雨戸が使われ始めた頃は入り側(広縁)の外廻り、落縁の内側に設けられている例がみられる。
- ・その後は落縁がなくなり、雨戸が一番外側に設けられている例が多い。

以上より時系列での「雨戸」位置と縁の関係をみることができる。「雨戸」発生初期と引通し雨戸は、形式は違えど、縁も含め室内を守ろうとする仮設的な装置として扱われていたと考えることができる。

また、雨戸の位置から、「雨戸」発生初期は広縁と落縁が室内空間となり、引通し雨戸完成期には広縁が室内空間となって落縁は外部空間として扱われることが多くなる。以降、広縁とともに落縁がある遺構があまり見られなくなるが、その背景にはこの期間において、落縁と広縁の区分けが明確になったためなのではないかと考えられる。

結論

本研究では今までに明らかにされてきた建具の発展史を基礎として、外廻り建具の展開過程を2点に限定して分析した。第2章では、蓐戸から遣戸への展開過程の背景について絵図の分析によって当時の人々が蓐戸と遣戸をどのような性質の建具として捉えていたのかを考察し、同展開過程の持っていた性質

を明らかにした。

第3章では、「雨戸」の発生から引通し雨戸が成立するまでの展開過程を整理し、その展開の速さが何かしらの「緊迫した」需要にあるためだと仮定した。同展開を「雨戸」位置と縁の関係として捉え直したことで、その需要が庭園であると仮定すると縁の変化にも関連することが確認できる。「雨戸」から引通し雨戸が発生したのは、その時期が庭園が流行する近世初期であったために起こったとも考えることができる。2, 3章の分析を通して、外廻り建具の展開背景に関してその展開が当時の需要に応じて起こっていることを分析し一つの背景として提示することができた。

注釈・図版出典

- 註1. 建築大辞典での定義。「柱間装置：伝統的な建物において、柱間に造作工事として装置される要素の総称。ただし壁は含まない。建具、床の間、違い棚、付け書院、欄間、窓、格子などがある。」（建築大辞典 p.1329 より）
2. 関野克「中世住宅建築における建具の発展」（1941）, 松田松韻「鳳凰壁画中の住宅画に就て」（1933）
3. 伊藤行「藤原豊成板殿の復原について」
4. 増田友也『家と庭の風景　日本住宅の空間論的研究』（ナカニシヤ出版,1987）
5. 平井壘「近代都市住宅における雨戸の変遷と近世における雨戸の発生から引通し雨戸の成立まで」において、形式として立て続けられた江戸城の本丸を除いた場合 1620 年頃には蒔は使われなくなるとしている。江戸城を含めると 1858 年となる
6. 平井壘「近代都市住宅における雨戸の変遷と近世における雨戸の発生から引通し雨戸の成立まで」（2013）
7. 恒例・臨時の儀式、行事における調度について、指図によって詳しく記したもの。1146 年ごろにできあがり、四巻からなるが、作者は不明である。東三条殿における装束の仕様について記し、平安時代のいろいろな調度についての研究に貴重な資料であるとされている。
8. 平井壘「雨戸に関する一考察」（1976）より

- 図1　筆者作成
- 図2　『類聚雑要抄』より
- 図3　『年間行事絵巻』より
- 図4　『法然上人絵伝』より
- 図5　『春日権現験記絵』より

主な参考文献

絵図について：

- 『春日権現験記絵』（東京：角川書店，1963.4）
- 『法然上人絵伝』（東京：角川書店，1961.5）
- 『鳳閣見聞図説』〔源宗隆〕〔撰〕　写,〔書写年不明〕
- 『年中行事絵巻』小松茂美, 吉田光邦 執筆（中央公論社，1977.12）
- 川本重雄, 小泉和子 編『類聚雑要抄指図巻』（東京：中央公論美術出版，1998.4）
- 秋山光和『平安時代世俗画の研究』（吉川弘文館,1964）

建具の変遷について：

- 太田博太郎『書院造』（東京大学出版会 ,1966）
- 伊藤鄭繼『中世住宅史』（東京大学出版会 ,1958）
- 小泉和子『家具と室内意匠の歴史』（1979）
- 高橋康夫『建具のはなし』（鹿島出版会 ,1985）
- 太田博太郎『新訂図説日本住宅史』（1971）
- 川上貢『日本中世住宅の研究』『古事類苑』（吉川弘文館）

目次構成

序論

- 0.1. 研究背景
- 0.2. 研究目的
- 0.3. 研究方法
- 0.4. 既往研究と本論文の位置付け

本論

第一章　日本住宅史下における外廻り建具の変遷

- 1.0.　はじめに
 - 1.1.　柱間装置「扉」の発生と普及
 - 1.2.　仮設建具からの展開
 - 1.3.　引き違い形式の普及
 - 1.4.　住宅様式の変移と外廻り建具の変化
 - 1.5.　「雨戸」の出現
 - 1.6.　小結

第二章　外廻り建具の大きな変化とその背景に関する調査①

- 2.0.　はじめに
 - 2.1.　蒔から遣戸への移行
 - 2.1.1　蒔の定着と継続
 - 2.1.2　遣戸の定着背景
 - 2.2.　分析：軒出と蒔の関係
 - 2.3.　分析：平安時代文学作品絵画にみる建具の描画
 - 2.4.　考察・蒔と遣戸に対する認識
 - 2.5.　小結

第三章　外廻り建具の大きな変化とその背景に関する調査②

- 3.0.　はじめに
 - 3.1.　「雨戸」の出現と形式の確立について
 - 3.2.　分析：「雨戸」の配置と縁について
 - 3.3.　考察・「雨戸」の創造とその意図
 - 3.4.　小結

結論

謝辞

図版出典

参考文献